

リレー随筆

『聖路加国際病院での研修を通して』

鹿児島大学病院研修医2年目 | 池満 仁司

はじめまして。植之原先生より、リレー随筆のバトンを受け取りました池満仁司と申します。現在は初期研修医として鹿児島大学病院に勤務しております。私が所属する鹿児島大学病院の初期研修プログラム『桜島』は、県内に多くの協力病院を持つ一方で、県外での研修も可能です。救急分野で選択可能な聖路加国際病院、信州大学病院、大阪府三島救命救急センターの内、私は今年の1月から2月の2ヶ月間、聖路加国際病院で研修を行なってきたので、感じたことや鹿児島に帰ってきて考えたことを記させていただきたいと思います。拙い文章ではありますが、読んでいただけますと幸いです。

はじめに、私が聖路加国際病院で研修をしようと思った経緯についてお話しさせてください。大学5年生、たいていの医学生が希望の研修病院の見学をしているころ、私は初期研修先をどこにするのか決めきれずにいました。

全国各地から研修先を選ぶことができるマッチング制度ですが、私はそれまで九州内でしか生活したことがなかったため、都会の東京や大阪で研修してみたいという憧れがありました。そんな際に参加した鹿児島大学病院のオンライン説明会で、桜島プログラムでは、2ヶ月のあいだだけ東京で研修できることを知りました。都会には行きたいけれど、いずれは地元の鹿児島へ帰るために各医局の雰囲気もみたいと思っていた私にとって、願ったり叶ったりの研修プログラムだったのです。

桜島プログラムで無事に採用していただくことが決定し、ローテーションを決定する際、私は研修センターの先生に、「東京での研修

はできますか?」とお尋ねしました。

「1年目の1月以降に、2ヶ月につき1人まで聖路加国際病院での研修が可能です。同じタイミングで他に希望する人がいた場合、他の月に回ってもらいます。」と返答をいただきました。

それを聞いた私は、定員が少ないので1年内に東京に行けたらラッキーだな。くらいの気持ちで、ローテーション表を提出しました。

そして研修医1年目の4月にローテーション表が配られ、希望が通って1年目の1月と2月に聖路加国際病院で研修できることになりました。これで東京へ行けるぞと、私は大変喜びました。今思うと大変甘い考えですが、当時の私は「東京」で研修することに興味があったのです。

鹿児島大学病院で働き始めて間もなく、同期から「聖路加に行くなんて、意識高いね!」と言われることがありました。私はなぜ同期が自分のことを褒めるのかわからず尋ねました。

「聖路加ってもしかして、そんなに有名なの…?」と。

聖路加国際病院が如何なる理由で有名なのか、詳細は割愛いたしますが、私は恥ずかしながらそれらのほとんど一つも知らなかったのです。だからこそ怖いもの知らずで研修を申し込むことができたのかもしれません。忙しい上に全国から優秀な人が集まる病院で自分が研修をすることへの不安もありましたが、きっと何かの縁だ、必ず良い勉強の機会になると思ったので、改めて東京へ行くことを決意しました。(正直に言うと、皆に「聖路加に行く意識高い人」として認識されてしまった以上、今更になってやめにするのは格

好が悪いと思っていたことも理由の一つです)

今振り返れば、聖路加で研修することが決まっていたからこそ、他科での研修も、より頑張ることができたのかもしれません。また「聖路加へ行くなら、腹括って勉強しないとダメだろ」と、同期に叱られたこともあります、年末年始に数冊ではありますが、参考書を読んでから救急研修に臨むことができたのも、聖路加研修を選んで良かったことの一つです。

あっという間に時間は過ぎ、1月4日から救急研修が始まりました。初めの内は、基本的な手技やカルテ操作もままならず、戦力としてむしろマイナスではないかとさえ思いました。しかし多くの方々に支えられたお陰で、忙しくも、本当に充実した日々を過ごすことができました。

聖路加国際病院での研修を通してまず感動したことは教育体制が確立されていたことです。指導医は後期研修医を教え、後期研修医は初期研修医に教える。また経験豊富なスタッフは職種に関係なく、新人指導を行う様子が病院の至る所で見られました。教えられる側もそれに応えようと勉学に必死に励むという良い循環ができていました。特に救急部の先生方は鹿児島から来た何もわからない研修医でも温かく迎え入れてくださり、カルテや紹介状、プレゼンの型、各主訴における鑑別疾患、必要な検査、治療選択まで全て丁寧に教えてくださいました。

次に、勉強や文献参照の際の、積極的なIT機器の活用にも驚きました。経験した症例と疾患をノートパソコンのメモアプリに後から記録したり、簡単な抗菌薬選択であればスマホアプリを活用したりと効率的に診療を進められていました。先生方が論文をもとに作成したWebページで検索を行えば、わからないこととその周辺知識をほぼ全て網羅することができました。患者さんが来院する前や、プレゼンの前に自分で治療方針を考えたり、わからなかったことを後から調べて

知識を整理したりすることに大変役立ちました。

そして聖路加国際病院と鹿児島大学病院の救急研修における最大の違いは、初期研修医が対応できる患者数の多さだと感じました（もちろん大学病院での研修にしかない良い点もあります）。事実、聖路加国際病院は年間10000台から12000台の救急車を受け入れています。私の体感では、1日あたりおよそ70人から150人程度の救急患者を受け入れており、その三分の一ほどが救急車で来院した症例でした。1次救急から3次救急まで幅広い疾患の患者を受け入れる中で、研修医1年目は主に1次救急、2次救急患者の診療を行います。診療があまり早くない私でも2ヶ月間で400症例ほど経験することができました。疾患は急性上気道炎や感染性胃腸炎、尿管結石、喘息、骨折、縫合を要する軽度の外傷など、いわゆるCommon Diseaseが多いため、初期研修医の私にとっては一例一例が非常に勉強になりました。数こそ違えど、東京で診る患者さんが鹿児島で診る患者さんと違うことはなく、対応も同じであるため、今後の診療に活きる良い経験ができたと思います。

よく東京は怖い、都会の人は怖いと言われますが、2ヶ月間で分かったことは「東京ってそんなに怖くない」でした。道を聞けば優しく教えてくれますし、優しくない人の割合は東京に限らずどこでも同じだと感じました。救急部で関わってくださった方々も皆さん本当に優しく、この場を借りて感謝の気持ちを伝えさせていただきたいと思います。同じ一年目とは思えないほど優秀な同期は、鹿児島からきた私を気遣って何度も声をかけてくれました。研修医2年目の先生方や後期研修医の先生方には何度もご飯に連れて行っていただきました。こんな私に対して「3年目もうちに来なよ！」と言っていただいた時には非常に嬉しく思いました。看護師の方々をはじめ、そのほかのスタッフの皆さんにも知識や技術、心構え、多くのことを教わりまし

た。2ヶ月間お世話になり、本当にありがとうございました。

また当初の目的であった夢の東京生活についても、(基本的には夜勤明けの日限定ですが)かなり満喫することができました。浅草を回ってスカイツリーの展望回廊まで登ったり、食べログ百名店を巡ってみたり、お笑いライブを1人で見に行ってみたり、銀座、ジブリ美術館、ディズニーシーなど、一度は行ってみたかった所ややってみたかったことを経験することができました。

一方で東京の怖いところを一つ挙げるとすれば、ランチの値段が高いことです。ハンバーグ定食はハンバーグとご飯、気持ち程度のサラダで1500円します。あまりに物足りないので「食後のコーヒーはつきますか?」と聞くと「別料金で400円かかります。」と言われました。ランチの価格は鹿児島や、私が大学時代にいた佐賀の1.5倍ほどあるかもしれません。味に関しても、聖路加のある先生に言わせれば「焼肉や寿司みたいな素材を活かす食べ物は九州の方が絶対にうまい。ケーキとかパンとか、加工技術に関しては東京」とのことでした。確かに、私も同じ値段を払うのであれば、銀座の焼肉屋よりも佐賀牛や鹿児島黒牛の方が美味しい、築地の寿司より唐津の寿司の方が美味しいと感じました。

充実した2ヶ月間の研修を無事に終え、3月に鹿児島大学病院へ帰ってきました。その頃ちょうど、2年目の研修医の先生方は最後の研修先で3年目の準備をしていました。東京での研修中は、目の前のことだけに集中していたので、将来のことを考える時間はあまりありませんでした。2年目の先生方の姿を見て、私も自分の進路をじっくり考えてみることにしました。今の時点で結論は出ていませんが、研修医が診療科を選ぶ際にいわれるポイントには以下のようなものが挙げられると思います。

「急性期をみたいか慢性期をみたいか」

「内科系か外科系か、その他か」

「Generalにみるか専門性を高めるか」

「専門医が取得可能かどうか」

「興味がある診療科に進むのが一番だ」

「ロールモデルとなる人がいる場所を選ぶと良い」

「給料が高い」

「開業するかどうか」

「自由診療やフリーランスとして働くキャリアもある」

「どこまでQOLを重視するか」

など沢山のアドバイスをいただきいてきましたが、何度も考えてみてもやはり答えは出そうにありませんでした。医師のキャリアプランに関するガイドライン、フローチャートがあればいいのになとなさえ思います。あるいは今流行りのChat-GPTは私の理想の診療科を教えてくれるのでしょうか。そんな中、同期に相談したところ「選択すること自体よりも、選択した後の方が重要だと思います」というアドバイスをもらいました。今の私にはこの言葉が一番腑に落ちました。

どの診療科へ進む、あるいはどのような働き方を選ぶにしても、その場所で最大限努力していこうと思います。

ここまでとりとめもないことばかり書いてしまいましたが、他にも『【爽快】ボート競技に取り憑かれて』や『【感激】魅力度ランキングでは測れない佐賀県の魅力!』などという内容も候補に考えておりました。しかし自身の経験や心に浮かんだことを筆に任せて記すもの、が随筆であると国語の授業で習った覚えがありましたので、一番最近経験した研修の内容や、現在考えていることについて綴らせていただきました。

さて4月になり、今年も桜島プログラムを40人の先生方が専攻してくれました。自分の経験や学んできたことを、後輩たちに還元し、後輩からの突き上げに負けないように頑張りたいと思います。最後まで読んでください誠にありがとうございました。

次号は、鹿児島大学病院 高附 佳秀先生のご執筆です。
(編集委員会)